



## ○「四国の魅力③」

鳴門の渦潮→

「北の風3ノット、潮流は南向き2ノットの中で船が航行していたとする。風向きと潮流(潮の流れ)の説明で正しいものを選びなさい。」という問題を、掛高基礎力テストで出題しました。

解説では、危険なことの察知として向きを考えるというような話をしたと思います。具体的には次のとおりです。

\*風はどの方角から吹いてくるか → なにかが飛んで来る方向、(ヨットが風を受ける方向)

\*潮流はどの方角に流れていくか → 流されていく方向

ちなみに、海流は広い海を常に一定の方向に流れる大きな流れ。潮流は、鳴門の渦潮のように潮の満ち引き(潮汐)により、海水が周期的に変わる流れ。海水浴場での事故につながるのが離岸流で、海岸に打ち寄せた波が沖に戻ろうとする時に発生する強い流れです。

昔ヨット部の顧問をしていて、瀬戸内海であったレースに引率したことがあります。潮流が早く、スタートしてヨットが風を受けているのに、進行方向が潮流と逆だったため、スタートラインから後退していったことがありました。結局レースは不成立となりました。関門海峡では、「E7↓」のような海上標識を見ることができます。「E:潮流が東向き、7:流速7ノット、↓:流れが次第に遅くなる」という意味です。1ノットは、1時間に1マイル(約1,852m)航走する速度です。水産高校で見ると手こぎのカッター(大型のボート)は、こぎ手にもよりますが、約4ノットの速さが出るそうです。少し頑張っただけで歩く速さくらいでしょうか。7ノットなら、一生懸命漕いでも後退することになります。源平合戦の壇ノ浦の戦いで、潮流を味方には源義経が勝利したことは有名な話です。潮流の早さは10ノットにもなるという瀬戸内海の難所は、「一に来島、二に鳴門、三と下って馬関瀬戸(=関門海峡)」と昔から船乗りたちに恐れられてきたそうです。

私が大学時代を四国で暮らした時期は、瀬戸大橋も、明石海峡大橋も、尾道今治ルールの来島海峡大橋も開通しておらず、必ず船で四国と本州を行き来していました。鳴門大橋はたしか大学2年生の時に開通しました。橋をはじめて渡った時、その橋の大きさに感動したことを覚えています。橋にばかり関心が行き、渦潮をきちんと見たことは正直ありませんでした。約10年前にはじめて渦潮観光船に乗り、間近で渦潮をみました。自然の偉大さを目の当たりに、ただただ感動しました。

徳島と言えば、鳴門の渦潮が有名ですが、一番は阿波踊りではないでしょうか。約10年前にはまってコロナ下となるまで毎年観に行っていました。江戸時代から約400年続く伝統芸能で、「踊る阿呆(あほう)に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らな損々」と言ってグループで踊ります。

他には、「すだち」や「鳴門金時(さつまいも)」なども有名です。すだちは研修旅行で行く神山町で商業生産が盛んになったことがはじまりで特産品になったようで、全国の生産量の9割以上を占めます。また、研修旅行の時期は、ちょうど鳴門金時の収穫期です。歴史の教員としては阿波藍にも関心がいけます。藍染めの青い色は、「JAPAN BLUE」として世界的にも有名な日本を代表する色で、サッカー日本代表のユニフォームも「ジャパンプルー」です。吉野川の氾濫を逆に利用する形で、江戸時代徳島藩主蜂須賀氏が奨励して盛んになりました。

他県のことを知ることは、ふるさとの再認識、再発見する契機にもなると思っています。

